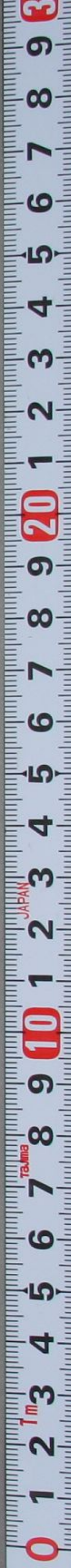


貞丈雜記

十上

73
6592
19



書文雜記卷之十

弓矢之部



- 一 弓をたらしと云事
- 一 ぬばとぎの事
- 一 暮目と事 四ヶ条
- 一 矢の羽と事 四
- 一 鏢矢の事
- 一 へばたうたおの事
- 一 新矢征矢の事 二ヶ条
- 一 弓矢を調成と云事 二ヶ条
- 一 矢と事 四ヶ条
- 一 弓と事
- 一 差矢の事
- 一 へり矢の事 四
- 一 福矢の事
- 一 八張弓と事

雜記十

目一

昭和十九年四月五日
故三上於五十年
二上 贈

一 養目一腰

一 むらじまの弓 圓

一 音籠弓 ニヶ条

一 本まら孫弓

一 ぬま弦せま弦

一 神代の弓 久事

一 弓くし

一 せまつらぬの弓

一 弓の長サの弓

一 久米長舟の弓

一 そば白木の弓

一 ぬま弓白木の弓

一 弓のせんん亭 馬

一 ぬま弓の馬

一 つく弓の弓

一 梓弓檀弓楓弓柘弓柘弓

一 十張弓

一 峯ばあーの弓

一 弓のたぎりを定る弓

一 久米長舟の弓

一 こつー 篋の弓

一 矢の苦みく 六ヶ条

一 糸もぎの弓

一 こつーもぎの弓

一 弓の皮は口濡きする弓

一 のちろのこつーぎ 馬

一 久々根品弓 馬

一 つらぎ弓り比る馬

一 めまをまきくとる弓

一 おひ征矢

一 ちろ篋のこつー篋の弓

一 紙もぎの弓

一 うらぬもぎの弓

一 ちろーちげの弓

一 矢のまぎる弓

一 ぬまをちやうする弓

一 きちやうの弓 馬

一 旗標品弓之圖

一 犬射弓の芝草の圖

一 弓のまぎるの圖

さく羽のり

犬射巻目笠掛引目の馬

弓の形古存かきり

弓にきりし辞をきり

竹籠

手実のり

百矢とさきり

白菰のりのり

公方極は弓袋

上ぎりの矢

弓はきりしきり

引目を人射り

犬追おのりのにぎり

夷弓のり

糸叢のり

引目を獣射

八目の福矢

弓杖を間あり

酒殿のり

中ぎりの矢

征兵土差中さきり

実穂よ矢さきり

粋の矢のり

巻目と大小のり

巻目とさきりのり

矢のまけりのり

さきり籠のり

たつばのり

三ツ懸四ツ懸のり

そば巻のり

弓と巻のり

弦をつまむのり

笠掛引目ひき目のり

竹の根引目

ちり巻のり

材を巻のり

草籠のり

碁石のり

せんたん巻のり

二重糸漆のり

唐詩鼓吹卷五
皮日休が圓載
上人日本ニ歸ルヲ
送ル詩ニ貝多紙
上經文動ト云句
アリ其註貝多
出摩伽國長七
尺冬不凋トアリ
六七尺ト云ル註出
処オホッカナシ

杖と書うへう後成恩寺殿兼良公乃あはけしあひし
公クジ根コシ源ゲンと云書ふ弓をはたらしと云る天竺の貝ガイ
多タ羅ラ葉ヨウハ其の長さ七尺五寸し弓の長も同し
多羅葉ヨウハこれを多羅杖シとやと何りハ説あやほり
あり翻譯ホン名義ヤク集メイと云書何り天竺の弓を書し
書あり其書ハ貝多羅樹ガイといふ木ハ櫻シユ櫚ロの如し
あしスガ一イ言コト長八九十尺花ハ粟の如し何人ハ云
一多羅樹イと云ハ高さ七尺シを云一尺シハ七尺を云る
七尺ハ四十九尺と何りて七尺五寸と云るハ
多羅樹の年を弓の年と云合てハ本ハ出

乃以ひ出くある弓ある魚く是とひいつる日舊記
ありともうまのるハ用ひがし

- 一 弓矢を調テウ度ドと云る調度ハ道具の年ハ弓矢ハ
武家の才ハ道具あり故弓矢を調度といふ後世
日及て近代ヤリ鍵カギを兵具ヒヤウクの才ハ一番鍵を言ふと
まらありハ鍵のるを道具と云は同し心あり調度
態の役と云も弓矢を持つ役ハ後志の部ハ記す
一 矢をてうハともてうトとも云大造物の書ハ公方極
は大ら遊可法矢のるを法てうトとも法てうトとも
云事ト云ありてうトとも調度とトハト五音通

夫木抄は六帖題
氏親御為家の
系にあつてもや
はきの里の物
さうら花の女
あかりの物
古抄カハを中
云々ありてカハサ
ラを云うけら
カハサクラのカハ見
まはハあり

まのこころしと云ふに云はれと云詞の如く
馬矢の敷名あまきと云貴人の馬矢矢をさけん云ふ時ハ
弓をほはあしと云ひ矢をほはしと云ふ古の風俗
一 矢のめをけきと云いす内みの木に阿海うらまんと云
あり樞の木のはまんと云いあやすりてけ事書れ雜
雜少あまこまり檀マユミの木にあまはま羽の上をまき
一 矢の根まらん志りと云物あり根の先を劔の如く三
角ま志をまき書れ雜少書ま云ん志をけん
まきと云ふ由貴殿は作は云貴殿とハ伊勢守
まきと云ふ

- 一 征ソマ矢のめりもいさくぬおひまやのりんと書れ雜少書
見たりおひまやと云えひうまさす征矢私云りかうまま
十六矢まどづり矢をばさぬと云矢の耐はと云母存
の内を二ツ取のけととづり矢をさし一添て母存と
書れ雜少書まよるおひまやと云矢のめりとがら矢一名
矢を糸まきますりかうらまきハ左よりの糸わらぎハ右
よりの糸わらぎと云く小笠系流並多賀豊後まははま
おし秘事と云へり授物ハサモに記し見たり
- 一 墓ヒキ目の木ハ朴ハクの木布フと相キリの木ハ略キリと輕キリと云用キリ
- 一 墓目の木ハ大方四寸と云れども弓の強きハ大ひきめ

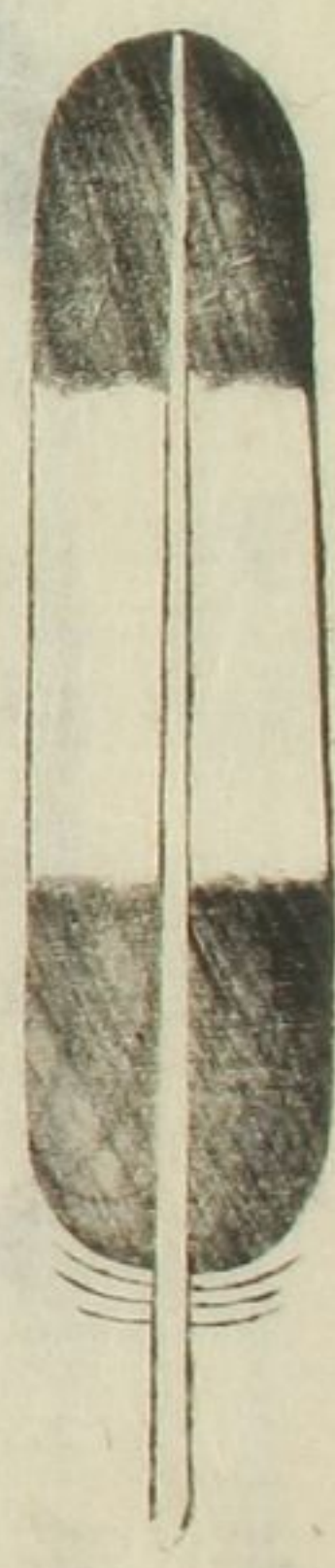
又獲水...
又方...
又依...
又...
又...

右真羽の圖は大方通用の羽はけおけの文...
先羽の繪別は一...
一...
...
澤虞即獲田鳥也...
澤虞即獲田鳥也...
澤虞即獲田鳥也...
澤虞即獲田鳥也...

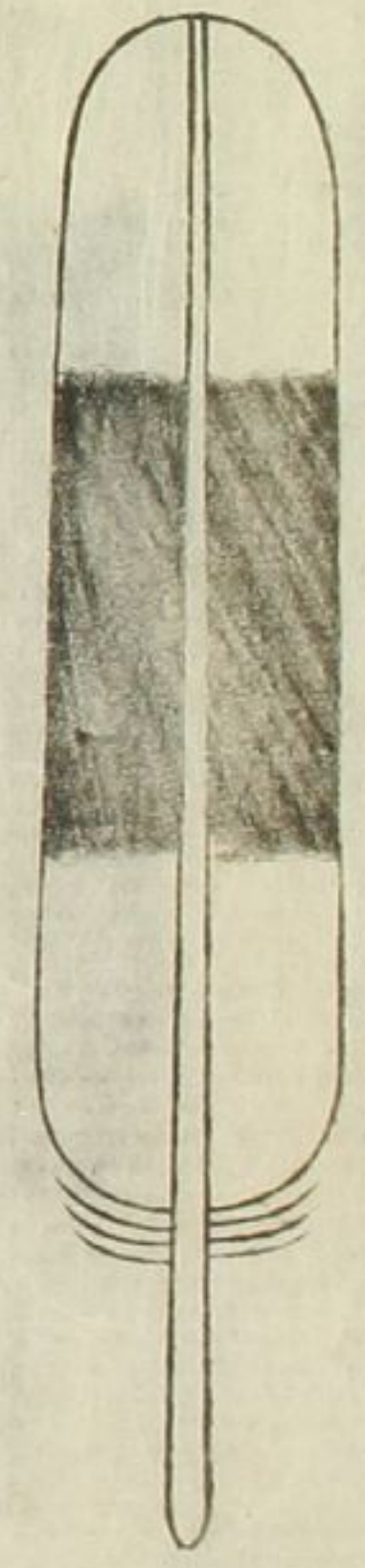
雜記十

七

中白



中黒



切文

キリウ...



うすへお

ウスベウ...



うすや

うすやの...
...



夫木抄曰民於
 為家必以鳥羽
 射之為事也
 其の多きを
 一々と記す
 参考係元初
 行矣一腰
 東鑑卷四
 野箭一腰
 陸相所矢
 日名

日射る久く是も征矢のこころあれも庶相ワササもこころ
 羽をも何羽もともあるふすもせしむ野山も射の村
 射も久く射野矢と云野矢ハ庶シ箭エヒラ一名ハ射箭シヤ久也
 東鑑卷三十二云京兆被献野矢行勝等又同卷嘉禎
 四年二月七日將軍頼經公入洛行列之中次ニ衛乗晉二人
 トアリテ其下ノ詔童野箭候御輿右童野箭候
 輿尤又同卷十三のやトアリ又同卷二十二將軍御出
 隨兵候先陣六位十二人著水干 負野矢在御輿前同卷二十七義
 村献御引出物其中御野矢と何り野矢ハ行列の時
 負ひ引出物も献も同卷三十四仁治二年上

月四日為武藏野水田開發御方違渡涉千秋田城以義景
 鶴見別庄中畧宿老帶野矢若輩為征矢○征矢
 逆頗サカツラ箭エヒラ思塗クロスリ箭エヒラ盛野矢ハ狩箭カリ一名鹿エヒラ子盛エヒラ負
 一エヒラ箭も野矢と征矢と差別ある也又東
 鑑卷四十云前後供奉人皆著直番帶弓箭而歲早
 以後人皆負征矢四十未滿之輩第一野矢
 一野矢の羽をもきやう此輩小笠原兵庫助長秀記云
 所狩場の所供と騎馬六騎等へ出立水干行勝等
 皆をもきやう鹿矢の尻ヒツ箭コを負て上ウハヤ矢の四目
 をきやう羽ハこりをもきやう矢ハおのひも持り也云々

羽はこりけきことい野矢のそぎをこりけきとい
羽の楊を前らましく生れのみくして置くるを征矢
の羽ハ羽の端を前らましく又征矢ハ眞羽を本とす時矢ハ
何羽も用之征矢ハこりけき法式あり
法式無之是野矢と征矢の區別也
の羽ハ端を前らましく野矢のるを鹿矢とも云く羽は羽の
也
日本紀敏達天皇紀ハ獵箭志やと
よむ獵ハ射り矢ハ野矢の事あり

一 八張弓と云るハ神代の四弓と云るを崇へて定こりあり
ありハ神代の四弓と云ハ大日靈尊の持ひし弓を

弓と云高皇產靈尊の天稚彥小孫りし弓を發向弓と
云瓊杵弓の天降り時供奉の徳神の持ひし
弓を獲持弓と云亮火出見弓の持ひし弓を治世弓
と云ハ神道家の祝ひも日本紀田原記古事記を
云上古の神書ハ存陣弓獲持弓治世弓あり云
名ハ見えす後ハ名付る名ハ此神代の四弓の名を崇
ひハ八張弓の名を作りしありハ三俊一統の首實檢
の作法を記しし箇条ありハ太平弓ハこりけきと
あり是を以て考れハ是利服の法代ハ八張弓ハ
名何りしとされも世ハあやぬく用さるる也ハ三俊一統

の外ハ其時代の書ハ八張弓の名ハ見えすたげ最本存
篠ぬり弓白木をば白木村とき二所最長弓あり云
名ハ見えれども太平弓ジキヤウ蛇形弓ラキヤウ羅形弓サライ相伝弓サイ四足弓
陰陽弓インヨウ福起弓フクジ世平弓セハイホの八張の名ハ見えざる又流儀
より七八張弓の名も遠よりホの小笠原ありて定め
年をそれより七外の家、まても少々の教ホを
名をも替へて其の流ハ此と流儀をまじり相あり
小笠原ホの是則敵の時代も弓馬の流儀といひ
年あれハ小笠原の流を本とす又外ハ一張弓と云物
左の弓の形ありずリヤウトウ蛇の形ジ加いざるあり云外

玉の弓は似せる形を作りおぎりより上二十六兩最を
不動ドウブツの二十六童子又二十六キン倉クラよりとり中廿
八所最を考へ廿八箱かどり又ホケキヤウ流儀の二十八ホシ
ちどるとも云説何りいりき物を用がし外
九張弓十張弓ありてさゆの名を付し物あり物也
も古書ハ見えざる弓の名もまた甚いぐう後人の作
意も作し出しし物也
一 藝目ヒキメ一腰ヒトユビといふ四ツのあり是ハ大追おの時あり古ハ
四の腰よりして出る故に後ハ三の腰よりして出る物
て出るとゆるふ藝目一つの事を一腰といふ人あり何や

歩まは七八ふ
寸の弓を用馬
上弓八五寸のま
ましく上二寸ま
わたくし寸ま
つひま

一 ぬま弓と云はうぬぬの弓之弓馬故実より弓は
つりあり先ハ二面皮をつり本之以外ハ四方はぬとも
心は才よつりへ一定法を以て別皮をつひても
上をぬまのままにまを白くして置く本は口を
まもぬまのままにまを白くして置く本は口を
矢束りの皮の方を上以上二面皮をつり口を
始と巻終の二面皮の下へ一層をまをさしてやどけぬるまを
事ハ是ハ騎射弓也

一 白木の弓と云はぬぬの弓之是も二面皮をつり弓馬故実
は白木は皮つりありまをまをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまをまをまをまをまを

流りへこの流と云事之白木ハ布武の的弓也

一 白木シラキの弓はぬぬ弦うけべぐぬぬ弓ハ白弦うけべぐぬ

又馬上ハぬぬ弓を用歩立ハ白木を用也白強く

村同上じきあるハ畧儀之ぬぬの弓古の定之旧記の出張記三見あり

一 重葎シテドウの弓ハ軍陣ガンガンは用る弓之將軍家ハ大将の持弓也

先重葎の弓ハ地シメナのこつら柄ハ秘傳あり其秘傳と云ハ其

人々の多くはひくも能き弓をまをびて小刀まの弓の

竹の上皮をこそぎ去る所の皮をみかけづりて平な

まべへぬをつりまをむぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

かけづりへ上皮をこそぎ去るぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

又閑弦のきり
もより三枚目
をもちす

つくをさるひ
丸本弓日折く
本竹舎せしむ
弓一サハ弓の
まうはぬ

盛衰記卷上静
憲与入道向答ノ
意上下ノ拜二
角入タル重藤人
弓持タリケル上
リ拜字ニツタカ
ナラ付タルハ誤ナル
ハ三拜ノ字ハヤトヨム
字ナリ極本ノ盛
衰記ニカナラ付タ
ルハ後人ノ所為
假名ノ自遠アヤリ
多シ用元ニ足ラズ

あめくると六射あし〜

一 弓子一ちり二ちり〜と云事物敷の敷はあやせ

一 弓小一ちり二ちり〜と云事見も物敷の敷はあやせ

一 法く弓のきり又は矢をつめり射矢の苗敷あや射打をさ

てそれの矢をうけて射り小矢こがれせぬる〜と云

一 太平記の中にも〜かこよも軍中急用のるは小笠

原家八張弓の内法く弓あり福花弓と名付七軍隊の

用へき弓〜といふ保元物語は東西八郎る朝五人張の

弓七尺五寸とて執らり〜といふ又太平記に

大塔宮二所葎の弓眼の執あくるを十文字は振るゆ又

同記は銀の執あくる弓の普通の弓四五尺と云事

有り是の扇は少〜又同書は銀のつくあくる弓の

言あるを帆ホハシラ板あ〜といふ〜といふ以上皆射打

をさ〜をさ〜又一説は弓の弭ハズの首をほく〜と云源平

盛衰記は上下の弭ツケは角入れ〜と云葎の弓持〜といふ

うら〜と云葎の首を象ゾウケ牙あ〜と云〜といふ

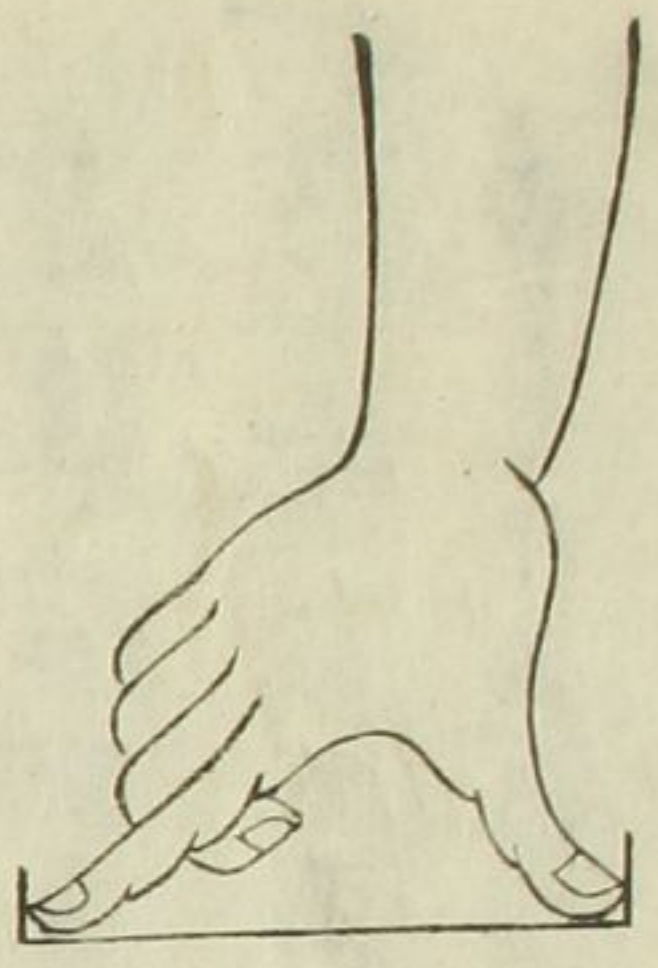
射打の事〜何〜に弭ハズの首〜弭ノ字ツタカト假名或人の説は

太平記は葎の法〜と云葎の弓持方〜と云近衛の官人の持り

弓のゆ〜を〜と云葎の首を〜と云〜といふ

非あり葎の執あ〜と云葎の首を〜と云〜といふ

右の乳のわき平をさすをあらく丸の子をのりて其とて
 右の乳のわき平をさすをあらく丸の子をのりて其とて



○つよくゆひをひくくす又なをゆすゆりゆる
 指をひくくす
 ○大指人さしゆびをのげして大ゆびのうら
 より人さし指の趾ををさしゆびをひくくす
 ○すくぬい人指ゆひをうめて中のうらををさす
 一すくぬい人

常用抄に云矢つもの弓やこ最上の松る之老若ともまを
 人のまをし弓やこ七尺五寸矢ハ十二束あり束法一ハ
 不知て尺定めて七尺五寸と云ちりふああるまれ
 云く又云南流弓のやとぶけの弓まの指をひて七尺
 五寸よりす法ハやう鞭と同一

一 弓のまをしを定めて射の方のまを云弓のまをしを定めて射の方のまを

右の乳のわき平をさすをあらく丸の子をのりて其とて
 右の乳のわき平をさすをあらく丸の子をのりて其とて

一 矢法の長サの半射の方すまを云矢法の長サの半射の方すまを

○ゆしてとて其のまを射の方すまを云矢法の長サの半射の方すまを

○又大双紙を云熱して我らう子して矢法の長サの半射の方すまを

○又人よりして十四束も又十五束も又十六束も又十七束も又十八束も

永仁布衣指記云
 矢黒塗廿八シト
 アリ廿八シト云ハノ
 コヒノニシテフシカ
 ケヨトリタルヲ云
 ナリ白篋ニフシ
 カケトリタルヲバ
 廿八シトハ云ハズ
 只フシカゲヲトリ
 タルト云トリサワ
 シノ文字ハ曝ノ
 字ヲ正トス云歟

一 矢一子とつゝ半ハお敷の款に記す

一 矢よさくらノ篋と云ハ拭篋トシテツラツケをぬらうを云

也 篋をぬらうツラツケをぬらうと云フ事一ツラツケツラツケをぬらう
今世のさくらノ篋ハ昔ハ竹ノ皮ノ一名ナリ

一 このツラツケハ火を焼て少ツラツケを付く

一 赤ウルニシテウスツナルナリ

一 のごひ篋ハ志々篋を云フ事

一 ツラツケと云ハ竹のツラツケを云フ事

一 ツラツケハ竹ノ皮ノツラツケを云フ事

一 ツラツケハ竹ノ皮ノツラツケを云フ事

一 ツラツケハ竹ノ皮ノツラツケを云フ事

手は板書ニシテハ竹ノ皮ノツラツケを云フ事

一 ぬらうと云ハ麻の角トシテツラツケを云フ事

一 とく志々のツラツケを云フ事 中古ヨリ節管ノ根ニ竹ノ皮ヲ削リ残スヲ又タ管ト云

一 加さすと云ハ管を篋トシテツラツケを云フ事

一 括りると云ハ篋トシテツラツケを云フ事

一 矢のツラツケハ矢のツラツケのツラツケを云フ事

一 矢のツラツケハ矢のツラツケのツラツケを云フ事

一 紙と云ハ紙のツラツケを云フ事

一 紙と云ハ紙のツラツケを云フ事

一 糸と云ハ糸のツラツケを云フ事

用書記云カハハ
キト云ハマエニテ
ハナリ云

第一将之三方極用のきある故之を記す
其の糸を用もるひあふし記す

一 かげをきいしあふの木のあまはうしを巻く細お記す

一 うねとぎと云ハ巾を白き片あて巻きて上をうり
しそぬし

一 こらもぎと云ハ羽の端をうりうづくと羽のせぬ乃
まゝと用あそをあり

一 ぬらげをうりし并の枝をぬらぎのうりし
あひあを思へうりしとぬらぎを思へうりし
事あり 一の下は皮をのこしてぬらぎのうりし

下地外は皮をのこして事あり

一 一の藤よりうねとぎと云ハ皮のうりし
其のあまのうりしは濡し小皮の糸を
糸をうりし皮のやどけぬるよめ糸

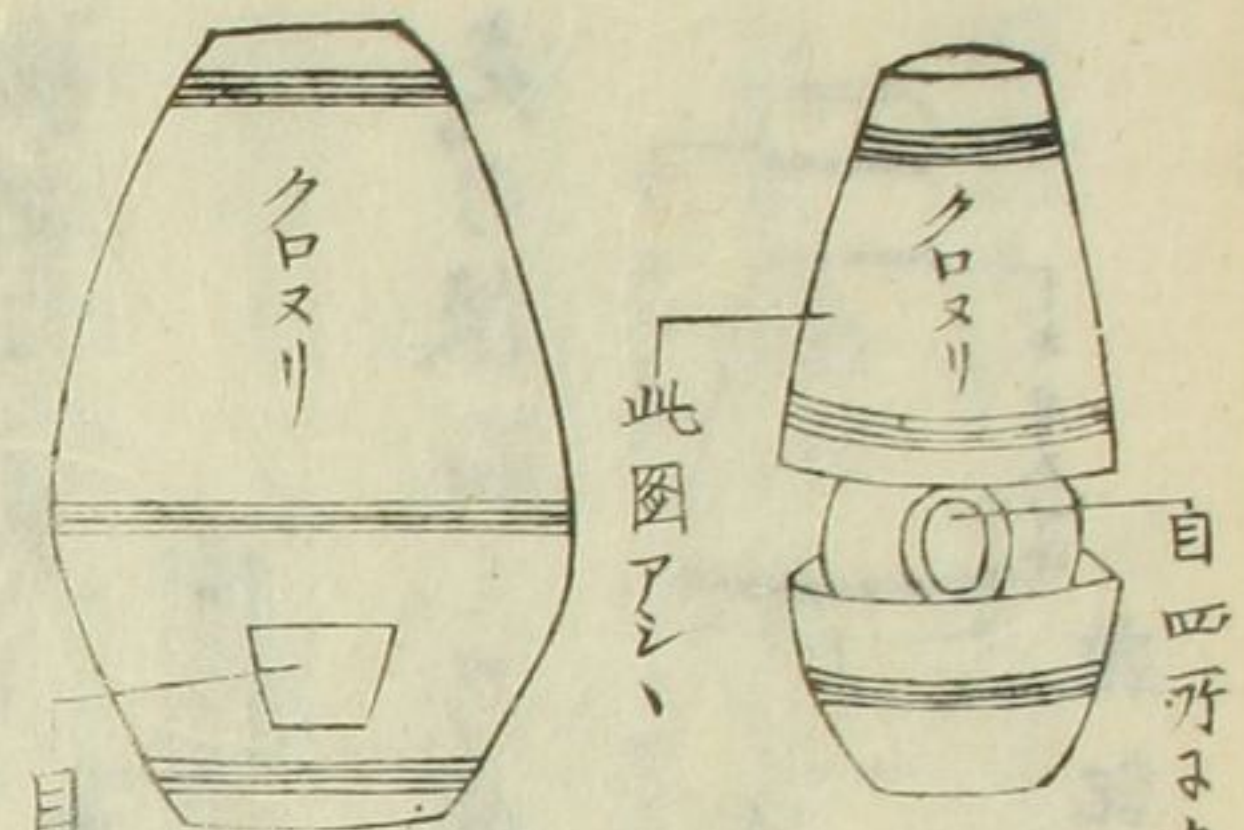
一 糸のうりしと云ハ糸のうりしを巻く
上のうりしを巻くは羽の中は糸を巻く
ハ篋の本の方をまゝと云ハ糸のうりしを巻く
巻くは糸と云ハ糸のうりしを巻く
の糸のうりしと云ハ糸のうりしを巻く
ハ糸のうりしと云ハ糸のうりしを巻く

雑記十

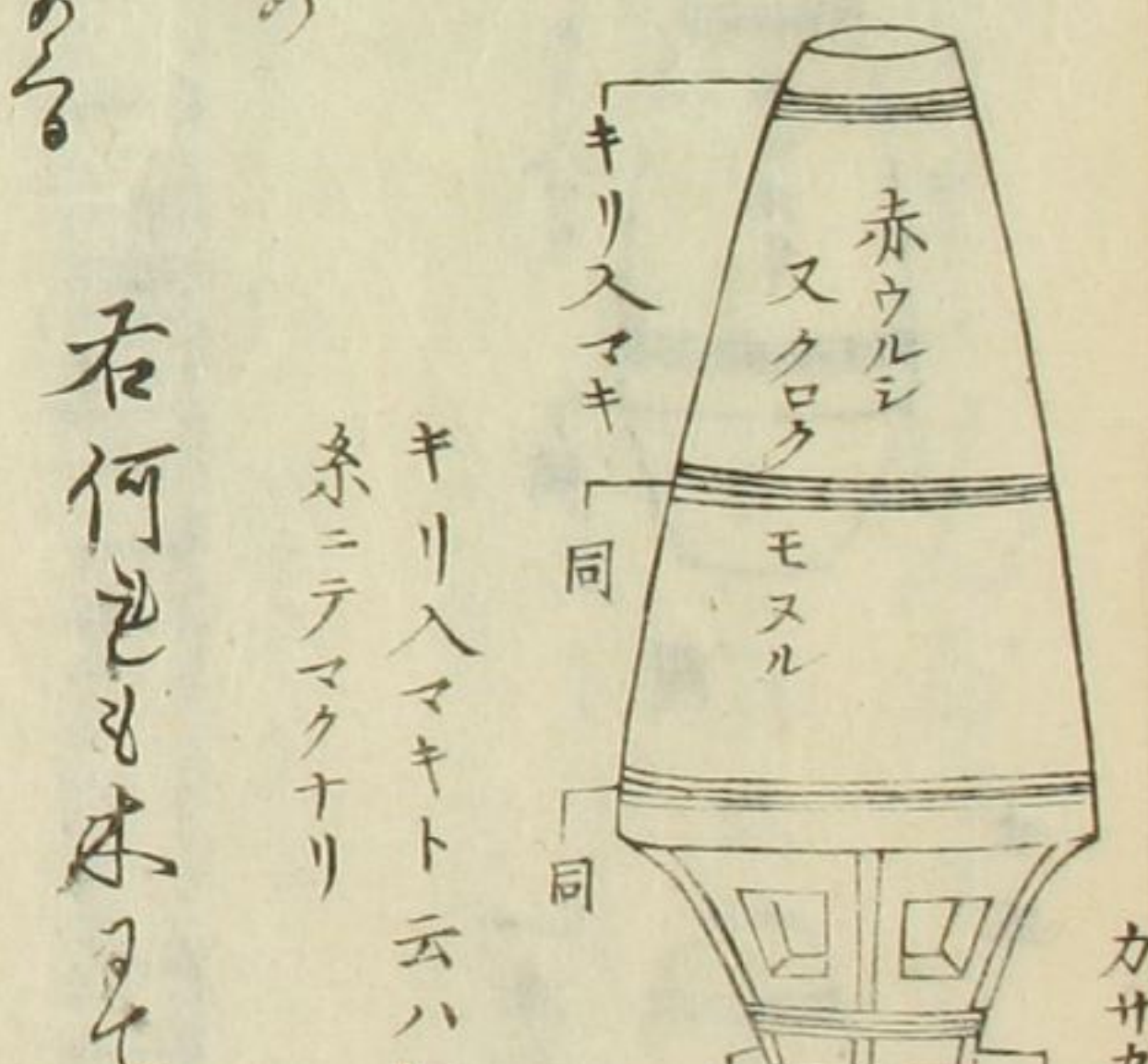
廿日

木棒ト云フ故木
ニテ作ルガ本々
ウニ思ハレトモ木
ハ畧ナリ

木ワリノ事義經
記ニ見タリ握の
木イ千井ノ木ナド
ニテ廻リ四寸長六
寸半ニ拵テ強弓
ノ射手是ヲ以テ
船ヲ楫板ナトヲ
射割ルモ故木割
ト云ナリ

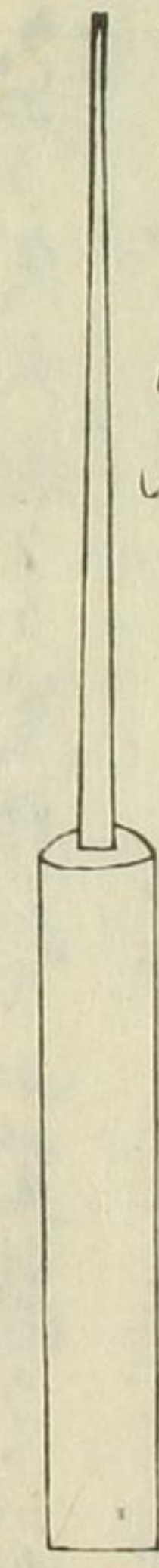


クロヌリ
目
自四所ある
此圖アリ、
志め
一ノ志め



赤ウレシ
又クロク
モスル
目バシラ
目バシラ
目バシラ
カサカヘシト云
同
同
同
キリ入マキ
同
同
同
キリ入マキト云ハ切クホメテ
糸ニテマクナリ

一寸半の目



鉄ナリ 丸シ
先ハ半ヤリ長八
弓ノカニヨルヘシ又ア
トサ弓ニヨルヘシ

或説はきぢうハ木ヲ作ル也ハ木棒ト書ト云ハあやうく
むあふとも作るともなハ誤あり

きぢうハ木棒ト書ハ木の棒の如くおめ此名付ナリ
鉄ト作ルハおんとうあどの代り射手ハ
木棒ト書ハ

應仁記曰神保宮寄傍の村安富民部ウ将へ使志を遣
今朝矢負の丈河原より箭矢を若狭を渡ル木棒を
かゝ合カレトヤけり云々きぢうハ木の棒の如く丸くして
さきを平に切らる物とて甲冑あるは透らば透らぬお
あゝる物つよきと敵を射倒しとて木を作りし物ハ鉄
の木棒を略ししもの也
イタヲス

此のぎと云ハ角のきと云々と云事ハ角と云キヨクを作
篋よさしこむおのあまハ竹を割りて角の中へさしこみ
篋よさしこむハ今ササキと云をつのぎと云ハ木
こりの形ハ竹の如く大小のちうひあまが木こりハ

品をれくは故実何りさうりな作るべくは射子具三秘
傳は委細見えり

一 かねをすくとさるの日記あり是は弓は皮を巻矢を巻
小糸を巻笛あとの糸も糸を巻又紙を細くして巻る
あつを巻ハ巻てかさを巻くといひてさうぞとい様の言あり
かけざらうの事ハ^{ひざらう}うを極の皮のめを巻くといひ心
外の木の皮ハ^{ひざらう}皮のきあみこ皮を巻るといひて
さうとてさうの木の皮の横はきあみこ皮を巻くといひ横は
あつとてさうの木の皮のやうな横は巻るをかきさうといひ
さうとてさうの皮を巻くといひて巻るといひあつハ
矢のかわき
ハ前の能事

一 犬射がう笠懸がうかりまがうおどくさうかうといひ矢がうの

事ハ^{まか}まかち^算算の事ハ^矢矢の事ハ^作作を云あり

一 弓矢を初め兵具の故實は併法の説ある武具の類は記ス

一 おひ征^{ツマ}矢といハ^{エビラ}服はさす征^{ツマ}矢の事ハ的出張記云うの布を

はつん^{あつ}あつとておひ^{あつ}あつはさす^{あつ}あつはさす^{あつ}あつはさす

云うの布も征^{ツマ}矢をさす^{あつ}あつはさす^{あつ}あつはさす^{あつ}あつはさす

おひ^{あつ}あつとて書札^{あつ}あつはさす^{あつ}あつはさす^{あつ}あつはさす

おひ^{あつ}あつとてさう^{あつ}あつはさす^{あつ}あつはさす^{あつ}あつはさす

さす^{あつ}あつはさす^{あつ}あつはさす^{あつ}あつはさす^{あつ}あつはさす

念ノ物トハ執念
ヲカケテ必射ル
ニト思フ也

又おひちやの時ハあつらひのやをそまへうらがの才の時ハうら
ハうらやまきす
そやのまきす
まけがーを採めりう馬故実ハ入へたり

一 うらがは久のさし指の圖ハ書札雜ノ圖書ノ何リ

一 志びうは久のさし指の圖ハ狩詞記ノ何リ

一 書ノ歌ハ念の才のまぢをこがし引のけて他念あきこころ

あけりやせんあり此方の心ヲ採を印的を我ありあはし

ちをこがし引のけて他念あきこころ射ハあはらるるも

有へしとまぢのさし参考保元物語ハ徳西八郎為朝の矢

乃筆を記したるあは久の根ハ楯破者舌もあはびのこの

いこゝるものをもさきむらも厚さ五分廣さ一寸長さ寸半

うらやまきすをバ篋ハまきすもせと何れまぢとハ久の根の

本の方久のこの切口を云々圖本記ハのをこちいふをバまぢと

中と見しりのをこちいふハ篋を切多のこ
圖本記ハ天文十三年
岡本美濃守

縁侍ノまぢと云字ハ禪コシの字を用きとあやまり成へし久

の根を待てし心まぢと云成へし待の字を用へし此

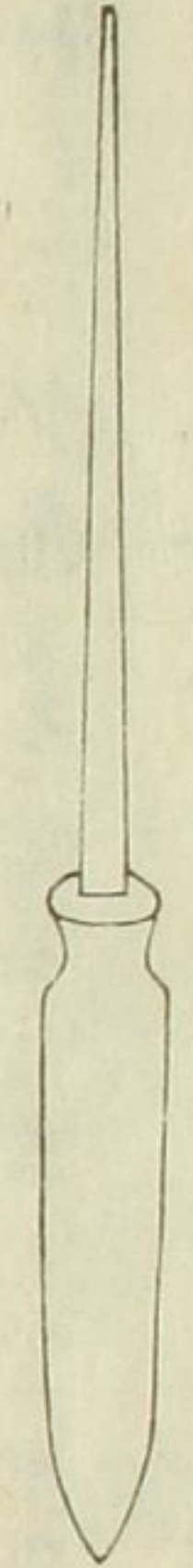
一 丸根マル子と云矢ぢりハ模コキの葉のこころ中ハ志のまぢを云

まぢと云矢ぢりハ模の葉のこころ中ハ志のまぢを云

又云丸根ハ今人のマウシガタトヤ根と見ゆ伊勢常言記云

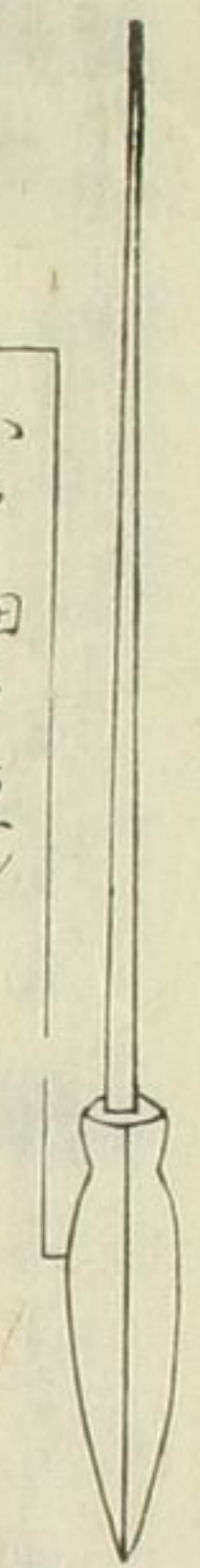
根ハ丸根或ハマウシ形ナド云々射字具是秘傳云征久の根ハ

九根奉之家中竹馬記云ウツホニ久サスハ征矢ヲサス拭首
ハ略儀之根ハ九根揚枝形之劍尻モ宮徳ニサスニ不苦ラハ

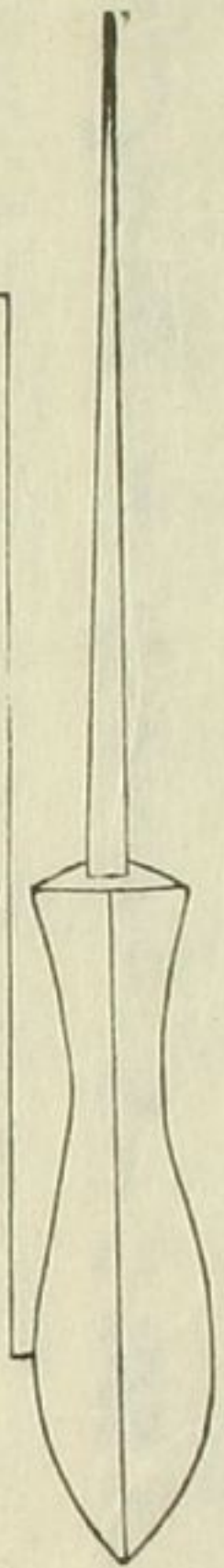


九根

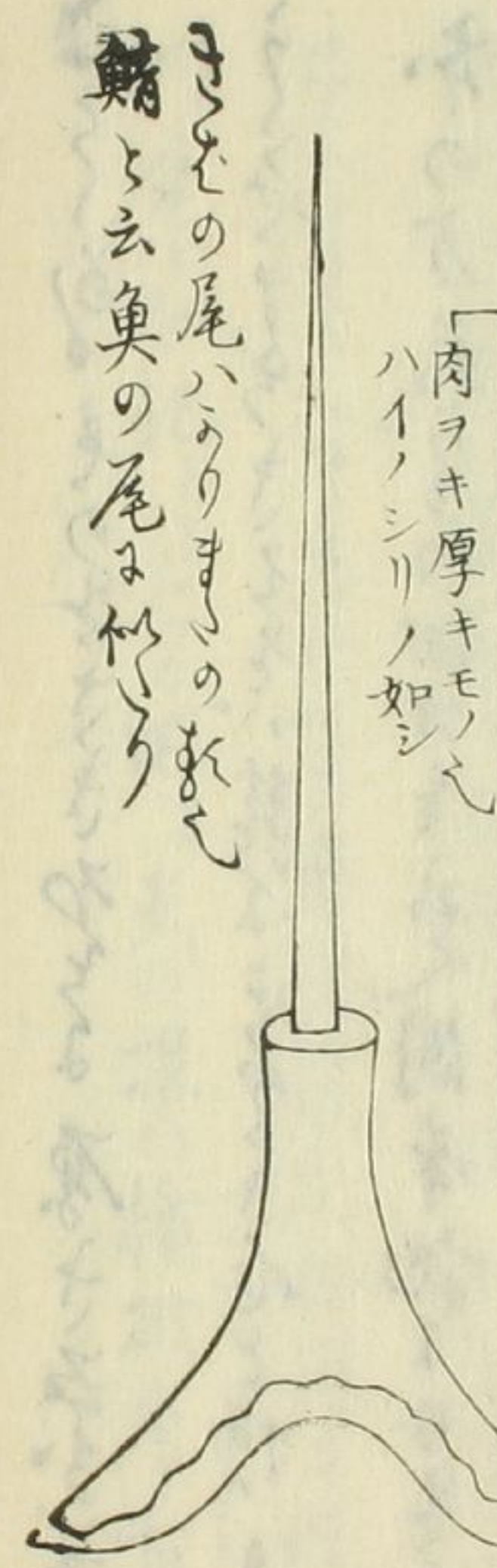
鳥の舌と云根も柳葉のこころの舌の形之中ふ志のぎ
きこく板葉の乾之九根よりハ平きあり



鳥の舌



蠅の尾

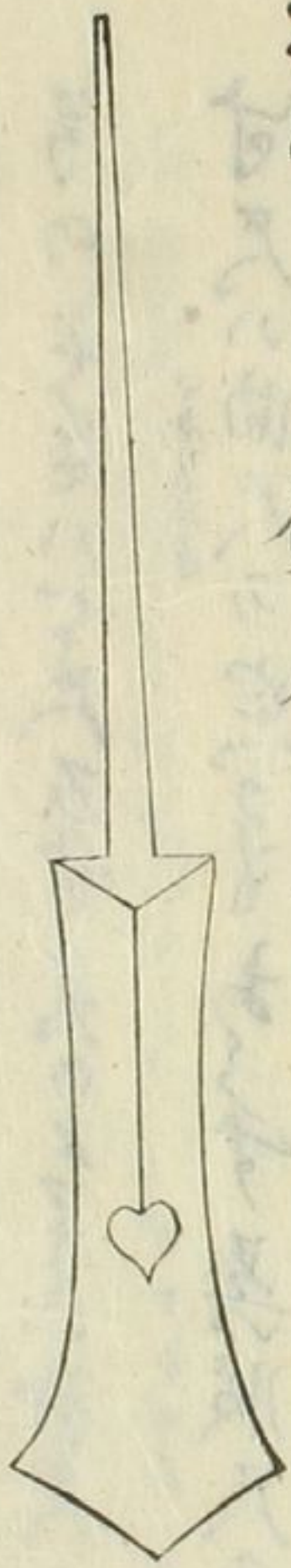


鯖の尾

きこく尾ハありまの乾之
鱈と云魚の尾ハ竹より

肉ヲキ厚キモノハ
ハイノシリノ如シ

オとヨりの劍尻の類



楯破



劍尻 本名 劍鋒

つとつき二品あり



推ノミト云
平題

延喜式は 延喜年中禁裏の 角の大いほき角の細い

ほき木の大いつとつとつり上古延喜の比ハ今のほき

らう矢のこころ角又ハ木を作りしと云へ

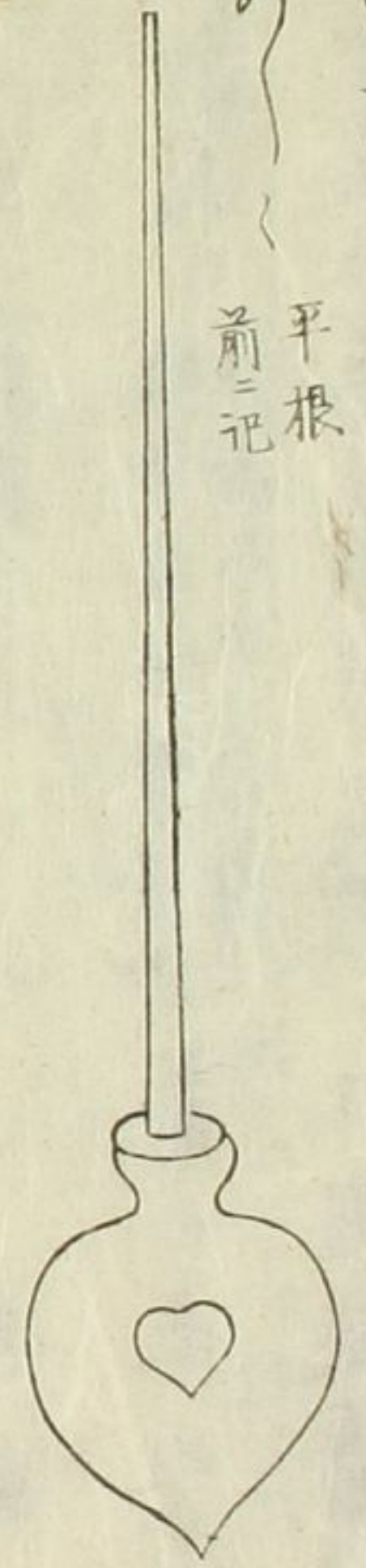
弓はまきく葉ハ本名ハ荊藤といふ荊藤といふ草の莖
の皮あり是を皮と云あり

夫木抄六帖題
俊實朝臣を六
とまゆらちのあ
ての風をすも
すやのつとつき
こころのつとつき
さくすのつとつき
さくすのつとつき
つとつきあり
つとつきあり
つとつきあり

一 弦はむくくも手は松ゆには油をまぜん出まあるくは物也
 一 弓の本竹を竹膠ニカワの野指イシの固を煮てとらう一はりのし
 一 とうあし是をみ極と云こ

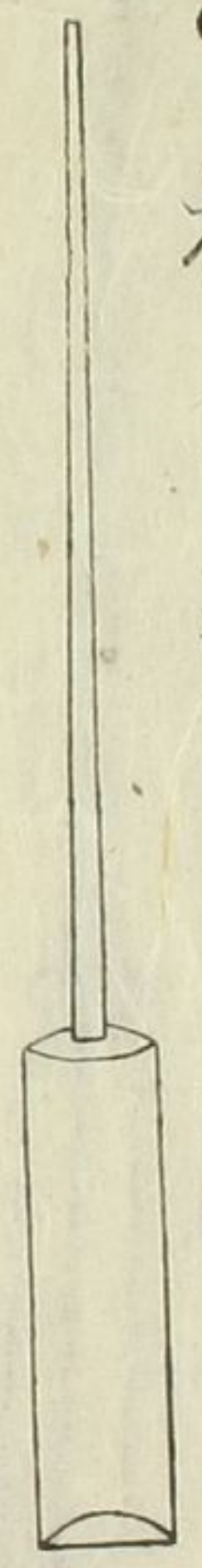
一 丸根と云ありこま記まの平根の形之是を丸根と云の

あ 平根 前記



丸根 マルネ

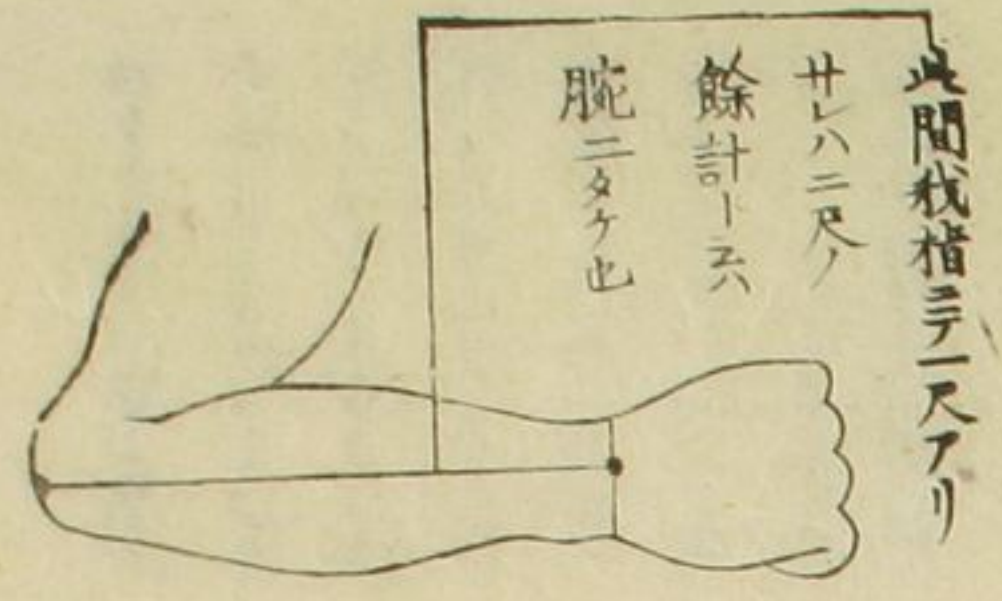
一 のこ根と云ハ鑿ノミのめ



鑿根 ノミネ

一 弓の長さハ七尺五寸矢の長さハ七尺七寸五分と定りこの
 寸尺ハ曲尺マカリガサの定りありす異服尺の定りありは是人の
カサ コフクザシ ニカバカリ

矢尺ハ大小ニヨリテ
 天然自然ノ寸尺也弓モ
 此矢尺ヨリ選ル故是又
 天然自然ノ寸尺也ワサ
 ト作り定タル寸尺非



手の寸尺定る寸の取やうハおはる寸ありか一矢の長サハ
 虎の手をさし一の巻て大ゆびと入し指との名の寸ハ一
 右の寸ハ一尺の幅の中ササの寸尺我ハ指の寸尺ハ七
 寸五分何れもの之是ワハ矢尺ハ一握弓の尺ハ右の矢尺を二
 寸加へても五尺五寸くば五尺五寸ハ七尺の餘計を加へ七
 尺五寸とある是我ハ弓の尺ハ是亦ある一尋寸之右の二尺
 の餘計ニ云ハ我ハ手の寸尺七尺ハ矢尺ニ寸ハ弓の長さ
 をあはの二尺七寸五分の矢尺十分ハひくれぬ故七尺の餘計
 を加へ十分ハひくも一握をさし草答ハハ弓の幅ササを右
 の乳の下ハ何れ虎の手をさし一の巻してはざらるゝおを握

或説ニ云クマハスヤセ
 フトス五音通ススマト云
 ハスグヤノ畧語也カリ
 マトカリヤナドニ對シ
 テスガナル矢ナル故ス
 ヤトニスヤノ詞轉シテ
 ノヤト云也云々自丈云
 此説甚ヨシソビラ夫
 説ヨリマサレリ

門の亭見し小弓の舎ある〜申東濫は何り云惠は下り
 危訓継来は揚弓者小弓と何る者お弓と云はせしる者を
 是をくまはり置て小き弓矢とて射てあてしれ由の者を
 とるたむれし近世と因舎はあ〜と云

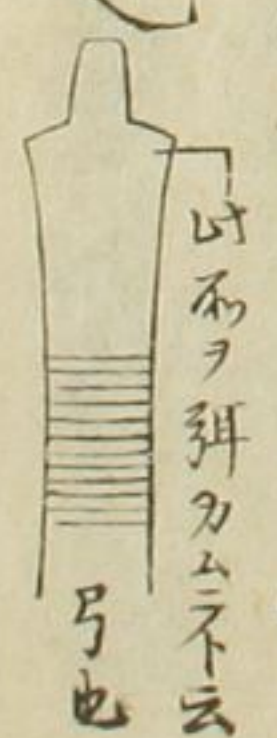
征矢ハ軍陳の矢之敵を征罰を矢ある故征矢と書く
 是ハ指も知る〜征矢と書てをわ〜ハ知人
 あ〜貞丈按もふとやと云名ハもび〜と云を畧〜と云
 といふある〜もび〜ハ背の半之征矢をハ腋〜と云
 負ハおまれの目本紀神代卷ハ大日靈尊の事〜背ハ
 千葉の鞆と五百葉の鞆を有ひき備ひ〜る見〜

光武征得矢上故
 征矢ト書ト云フ説モヨ
 ロシケレハ又一説アリ
 鷹ノ羽ニテギタタ矢
 征矢ト云也其故ハ鷹
 事ヲ征鳥ト云ハ也
 征矢ト書テフヤト云
 事ハ前ノ説ノ如シ

鞆ハ腋の強之神代より征矢をハ背ハ腋ハ物之背矢と書て
 そひ〜やと〜もび〜と云び〜やを畧〜と云と〜と云〜又背
 矢と書てせやと〜もび〜と云を通考ゆ〜と云と〜と云
 も前と同意あり

鞆根と云ハ弓の鞆の根の弦の〜と云お少先ひ〜と云あり
 何〜と云解をさす〜と云〜と云〜と云

近年袋を作てそれをさす〜と云〜と云〜と云
 弓のさすは袋をさす〜と云〜と云〜と云
 かむ〜と云ハ根の半〜と云弦も弦幅の根の〜と云〜と云
 う〜と云〜と云ハ〜と云ハ〜と云海帯の根を〜と云〜と云
 か〜と云〜と云ハ根の大半〜と云〜と云根を賞〜と云



一 小菅草コハズカハの草より久百間草百間草云々長青ノ祀也 小菅草小菅草

廣サ四分長サ一寸五分一方ハ蛇の頭の如ク一方ハ尾の如ク

先の方を五分後折て本葉に入きて尾をハ管の方へひいて

糸にて結ぶるを引バ蛇の尻の物に向りぬく弓の本形の

蛇と見ゆるを思魔と云ふこれハ管皮をたてぬるここの

大事の物を不可射管皮の皮の皮と糸皮を重ぬ

小弭草の圖  或ハ木の皮の皮ハ眼鼻の形

あつ掛け龍の如くもつらつて志ほり弭皮あつ名付松傳

るす新説も名見ハ小菅草の竹又一風習へり物弭

草と云物上古に云物弭本弭の麤れ換せぬる装をりけ

置る物弭あつをきこの説を作りける何の由来もあき

物弭思魔も思るあつり笑へり 弓の本形蛇と云ひる

一 矢の羽ハひたやくまふと云事も又むさこもあつ云法量

物弭云羽の羽をさぐ括む志やくまあを羽先もさぐり白き

箭の羽也  け圖用害

記ハ見りり鷹の羽のこは限らす其羽もても箭を切るも

羽をハ白箭の羽を羽先もさぐ其白き羽をむ志やくまあを

ひさごもあつりさぐむさごの花ハ色白き物弭をれきたとて

云事也 田舎 物弭のりはり

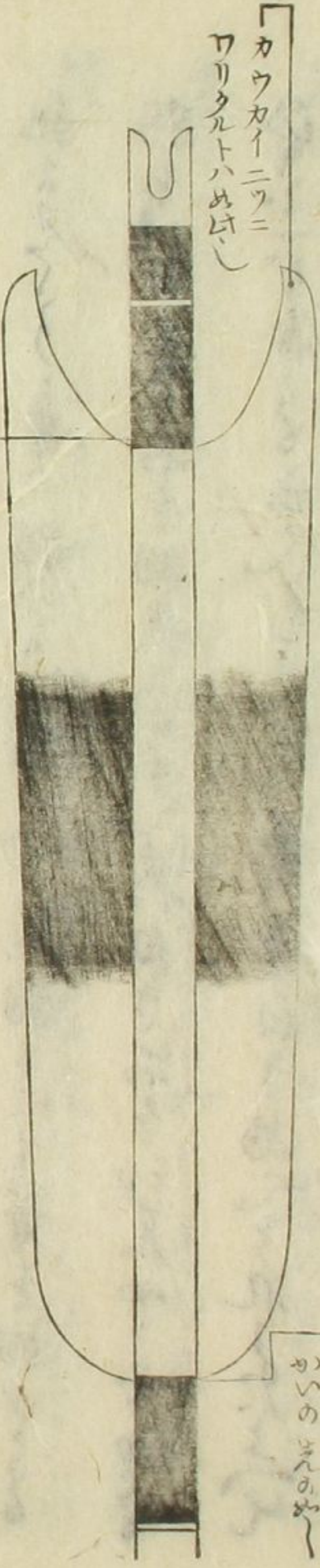
うりきたるへむさごのりはり 田舎

古ハ白き物たふ
まハひさごの花をさぐ
係平盛景記卷廿
石橋合録の家と与
毛太くさぐさき
七寸の金りて鳥の
さぐさぐさぐさぐ
とく白りてをれハ名
をさぐさぐさぐ
又さぐさぐさぐ
きを菊飛と柄抄
鬼とさぐさぐの光
のさぐさぐさぐ
白々れハ

一 矢の羽は羽と云ふものなりしつゝ其の形は羽の形に似たり上の方をさ

なり言忠少書の名名の如し

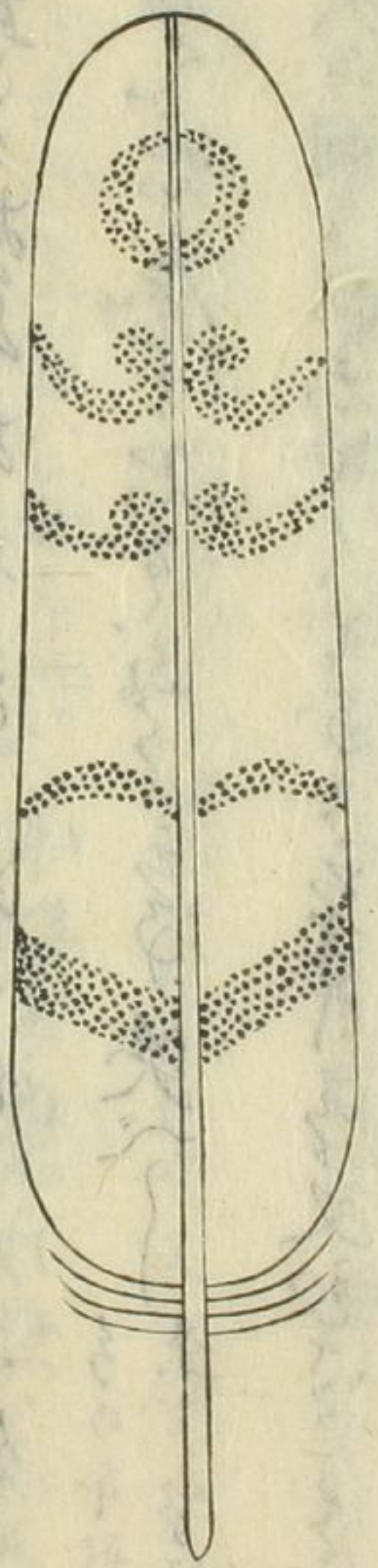
「本をきこの羽
ふきの形を
かくのまゝの如し



「は通りのより上の方を羽と云ふ羽より長サ九分斗
おふきハまがらうと云ふは羽の外ハ出さるなり

一 あゆのおゆと云羽の圖

「は思ある書はええうと云ふはあゆの如し



追記は圖は多
不可用は
末より可見

先大日ある人云
と云ふハ山岡後明
の説ニ其年四
季の字あり和
字に名なき人
也

あゆのおゆと云羽の事真羽の中は此あり

詳は云文初ればある人の云あゆのおゆと云を海人の

顔と云ふと云ひて繪畫は羽の文を人の形にして目鼻耳

口頸の形もを画ししもの安作あり

と云と云あり云舞の面は紙に

あてて舞かたあまの面の羽と云ハ安麻の舞の面のごとく

此の文あるを云ある

此の形を書き記す

此の文あるを云ある

此の文あるを云ある

此の文あるを云ある

おゆひ

あはすもりのりあし
 舞人の顔より假面
 を何のちりしとていふ



けりて紙

真丈按せりよ海人^{アマ}と云ハ魚をとり年^{ワサ}を業とすも志と人
 の顔も外の業をもち者^{オモテ}の顔も耳鼻口遠ありあて同
 面とされバ羽の文^フあまの面といふ海人の面といふりよ
 あまの安麻の家の面といふり粒あり面といハ假^{ソノ}面のり

ハキモンジフ
 八文字文

ハキクマ クマタカ



あまのおめし

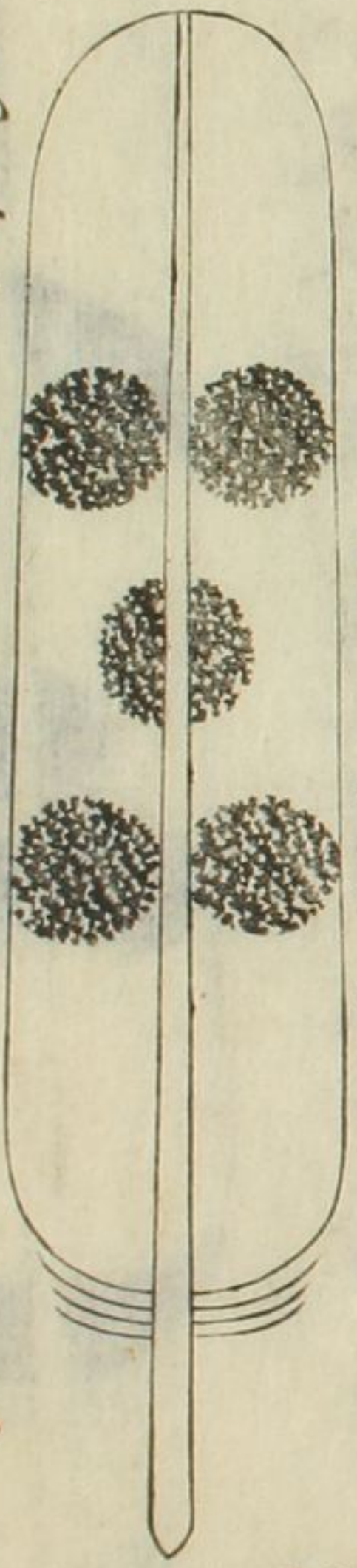
地白文ウス子ツミ色

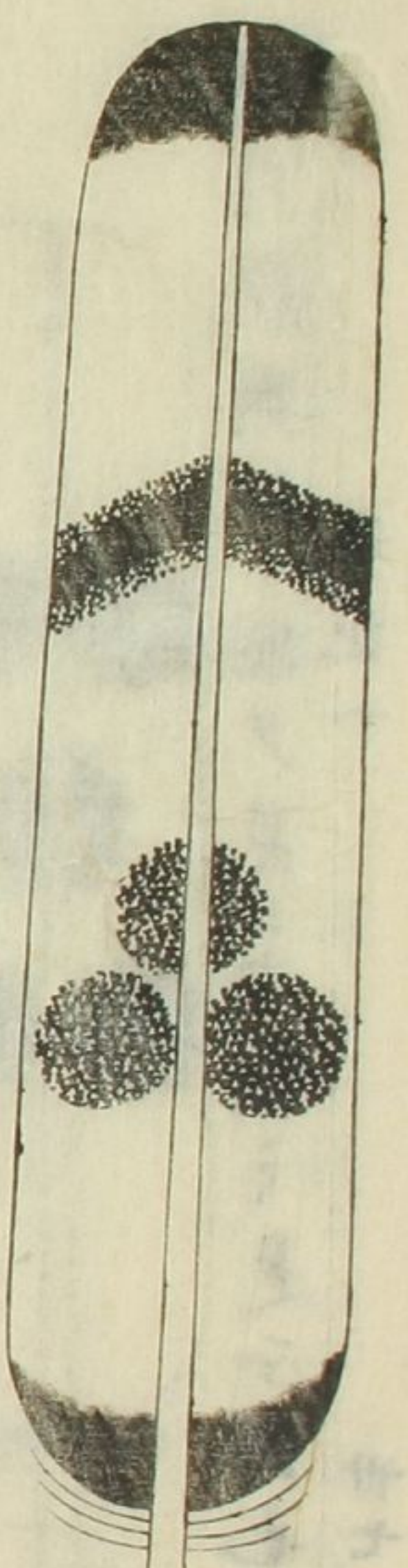
丈カキ上リ
 カタク下ル
 地白ク文ウス
 子ツミ
 コレハ松前ノ人
 エテ行テ取来
 ル前クヨリアテ
 面ト申シ習シ疾

嵯川親興此ノ羽ヲ見シ由談ク是正圖也

雜記十

卅七





是圖正真也

一 此圖ハ天文元年三月小笠原民部太輔長棟の番せし羽流
の中ハ之より箭の鑿川氏に見て留せしハ本末馬より
す時馬ハ本末馬ハ本末の白馬ハ其の馬中のみを
を△是ハ此の馬を以てあまのあまを云ふ

一 矢若と云ハおの射あそありともありとも夢をよるを云ふ
犬追おの時犬を射しハ我頭を云ふハありてありと言ふ
あ云ハ是ハ若くハ犬追お射し具是記ハ云ふ又將の時
麻を射く矢ハ云ハをまらハ顔をあはのけしあり

長く之は特洞記ハ見えたり
多賀高忠カ記也

一 矢音と云ハ矢のおありたる音ハ神頭シンドウの矢音ハむやう
しとトありたりと云ハ四目の矢音ハひやうとトありたり
之ハ雁股カリマタの矢音ハむやうなりと射切ると云ハ征矢セウシ 劔尻の矢
音ハひやうつむとありると云ハ福矢カフラマの矢音ハむいなりとあ
りると云ハ小笠原目蓋矢音ハ魚い志とありると云ハ
的出張記ハ見えたり又犬射墓目の矢音ハと云ハとありると
云ハ犬追おの書ハ見へりひやうといひ魚いといひひいと
云ハ皆矢のそむ射ありひびく音とトありとトありひいとひ
ありといひハむとありなりと云ハ皆ありありの音と

一 矢さけびと云ハ矢を射て物にあつて射る我首をさう
 へあつてあつとさうを言へさけが事とさふハち初は記し
 ても矢答のる平家物語は教改らぬ元といふ化名を射る
 事をつひる案もえらうやをうと矢さけびと何う
 又夫木抄は信実の歌「長多きあまのみうりの矢さけび
 2のこれぬ麻の袴ぞ夢ゆると思えらう狩の時ハ歌を
 あをのけてあくとまきいれ」あつてアル幸モアリ声似タリ け事おの矢答の 犬追物と外ハ
 額をたむきてあうといふは矢さけびの事異説多
 くれも證據なき偽多し用く平家物語夫木抄狩
 詞記を以て證とす一矢さけびも矢さけびと云あり

一 矢ハ内向と云ハ矢をさうつぎひて羽表我身の方へむき
 を云外向と云ハ羽表我身の方外へ向く内向は向
 と云る射的矢はさうし一ちある射へ外向をバ甲矢射
 へん内向をハ乙矢射へ外向ハ陽へ内向ハ陰へ
 陽の矢を先あつて陰の矢を後さる志内向外向的矢
のうへ内向のみをさ
向とも射詞記に見
 一 外向を見矢は射り内向を射矢は射るも急發
 定らざる法式ハあつたれも志の如くさるをさうと云へ
 されハ法量相入的詳拜記は定儀ハあつたれも外向を
 射る射へともさうと云へ定儀ハあつたれともさうを以て

定法はあはゆるるを知らず又的也張記は云見之才
よりて之を射習と云ふ外向をも如く射内向を
才之射を射はる秘説はる如き如き射はるは
と申傳ふことより是を考ふ定法はあはゆる秘
と云ふなり

一弓馬故実云云也如くやと云ふ内向外を云ふは
申すことひをより弓はまげて羽表のおへ来たるを
知べし是を以てし之を知らず少くはひるるとの羽表
の箭に向ふる内向外は心得の申す如くはひるるとの外向
之羽表のおへ向ふの内向外へ向ふる外向と知れ

一羽表を以てしはまがひし

或説云シシガウカラ
ハ神頭ノ事也神頭ヲ
シシトモ云也目ナシカ
ブラトテ目ヲタリテ
ルカブラト云是又妄説
也 追考神頭ノ
カブラト云事ハ何ノ故
ハナレトモ其名ヲ奇
妙ニ聞クセシ爲カリノ
事也中古以來武家
ノ風如此ノ事多シ
神通ト云詞ハ法ニア
ル詞也神通ノカブラ
タハ大悲ノ智恵ノ
矢ナト云類ニ其
矢ヲホテテ云詞ニ其
ハナキ事也

神通ののびる久と云は上ぎののびる久あるは實弓兵遊云
神通の痛やがはる用も上矢ののびる根はぬ不帰本を
赤漆はぬは是ハ筑紫の宇佐八幡と天子のあまがひ
矢あれども是の糸くしをさるたをわたり今も赤漆を
さす是を神通と云ふ云々真丈云神通の痛久と云わハ
あき物之射手方ハ用あり古傳書に學ぶは田村草紙と
いふ古き物傳は神通の痛久とあるより其後の人の妄作
たり之かの田村草紙ハ神通の痛久のこはありは神通の紐
神通の物之具神通の車あるは見えたり併法の説ハ神通と

扶桑見聞私記上巻
 書ニ神通ノ鎬矢也トテ
 六角ニカマヤヤウナ
 物ニ目ヲアケテ目ノ介
 ニ角ニテ鳥居ヲ作テ
 ホリコニタル形ヲ繪圖
 ニシテ是神通鎬矢
 中ト云是亦妄説也

いふ奇妙不思候方事も通達するものをも其物をわめ
 ていふんがなる神通の何といふものも其方の式あり
 ありきり物不後人其名を依て妄作して大切の事不
 いふ又天子のあをいふと云ふのあり候は用明天皇豊
 前國宇佐八幡を始て梳痛馬を射あふといひけり其日
 本紀其外山も記録ある事ある信用し候し一也
 此の妄説亦なき事

一 白真弓ニラマユと六海ゆみの本をいけづりける白木の丸木弓あり
 古歌あづな志は海弓とよみけるいけ事と又あづなは用射
 事し事し白毛弓とあづなを略して志は海弓と云ふ白毛と六

丸木抄信実相臣
 の事トウツカ
 秋アキの事トウツカ
 の事トウツカ

馬ゆりの弓トウツカ白毛ウラハを志たはしきあり重孫の弓の事
 あり寶弓兵鑑トウツカの流痛馬の神通のあづな志は海弓と
 持トウツカと云ふ射方聞書トウツカの流痛馬トウツカ弓ハ重孫の
 かづ也と有古事記トウツカあり志は海弓と六別と

一 弓の事トウツカの事ウラハ上トウツカ射トウツカの射トウツカの射トウツカの射トウツカの射トウツカ
 天智天皇時山阿麻生トウツカの物名とあり候事あり候事あり
 候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり

之里トウツカ射候トウツカ之用トウツカ

神代考ト云テ飛月
ト名付テ下ノ舞龍
ノ頭ト作ル考アリ是
ノ蛇形弓ト云ヨ世ニ
云テ入り信スルタ
ス龍ト地ト云フ物
ト思タルモ愚ナラズ
地ハハノ事ト龍ハ
ナリト

三好亭ノ御成之記
ニ云
モヤ之杖古流ノ流
云前竹トモ有テ

一 弓ハ兩頭の蛇をうごころと作りくろ物と云流ありは流非之

用處を以てあはれ蛇をうごろたりたるはあはれ本草綱目より兩

頭蛇の復は越王弩弦之所化也是を越王蛇と稱首蛇と

云云と云又唐土より樂廣と云人客を招て酒を呑也カ

壁ハ掛置と云角弓の形盃の中よりうりて蛇の形のみ見

元けり云はる盃の酒を呑て病を煩ひたるはる言

故事と云書より作り 唐の弓ハ角弓は作りたけ難し 右の越王の

弩弦あはれ蛇は變化したるはる盃中の蛇の影あどのるを

思ひて弓ハあはれ蛇の作りたるはる言はれ作り出たるはる

一的のこ備あはれ虫尤う眼はあはれ蛇の眼ハ五天知すあり

故今其大甘ハ大的を作り射流ハ虫尤を退治せん心と云

況あり 虫尤ハ唐の昔の悪念 以て流用へくもこ備あはれ人の眼の

黒目の中のひとこ備あはれ蛇の眼ハ五天知すあり

云へきも目何そのはるはる言はれ自然ハ眼ハ作りたるはる言はれ

眼ハあはれ蛇の眼ハ五天知すあり

一 弓は外竹内竹箭竹と云り射流射的の方へ向るを外竹

と云あ竹と云ハ我身の前へ向るを内竹の事と云

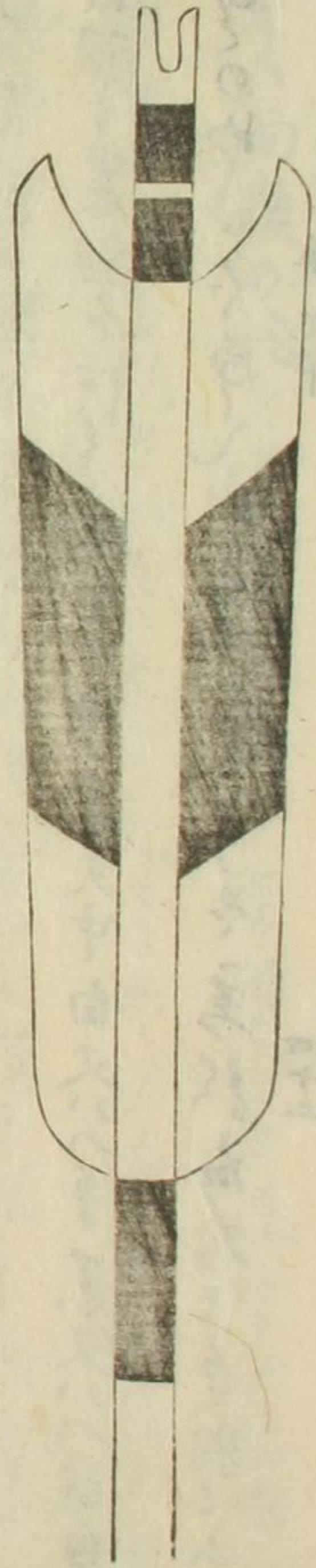
一 志きりも志きの矢と云ハ志きり羽と云るを深るは志きり羽とい

白羽と黒羽をほぎ合せて中黒又中白又ハつ手黒又ハつ手白

あとのゆも志きり白黒の志きり羽と云

甘露寺定成卿ノ
秀御草紙ニシキリ
羽ノ八羽黒羽三ノ六
キマセテ侍ルトケ甲傳
ヘタリ云々

夫木集 五月廿日
あききりいづやきり
きねハあやの草ハ
かひきりいづはあみ
ありきり



此白羽と黒羽とニまをつき合て白黒のあききり
まてあききたる之鷹の羽の文のこくもあききり

あききり羽の久ハ古公家ヲ用ルルニ保安元曆の記ヲ執
柄供奉行幸時府生番長平藤左衛門羽右衛門ノ羽
コレヲ新調^ス烏鷲^ノ羽ヲ以てニ府ニ切續キタリ云々此又軍器
考^ニ見^ルルハ切^リき^たるハあききり羽ノ便^ニ知^ル又四切^ノ羽
あききり^ニ知^ルト限^リ又支^キ切^リ知^ルもあききり
あききり^ノあききり^ノあききり^ノあききり^ノ

